



# 関西の未来をひらく 協力隊経験のチカラ

日本も元気にする  
JICA海外協力隊

世界を  
元気にした人は、  
日本も  
元気にできる！



# 世界を元気にした人だからこそ、 日本でできることがある。

1965年に始まったJICA海外協力隊は、

開発途上国の要請に基づき、

ODAの一環として派遣するボランティアです。

教育・スポーツ・医療・農業・ITなど多様な分野で原則2年間活動します。

これまでに日本全国から世界99カ国へ5万8千人以上（2026年2月時点）、

関西からは累計8,000人超が派遣。

帰国後は、現地で培った経験を活かし、

関西各地で「関西の未来をひらく人材」として活躍しています。



P.3

活動で紡いだ現地の人たちとの絆を胸にいまもガーナの女性と日本をつなぐ架け橋に。

相川 香菜さん

派遣国  
ガーナ共和国 

大阪府 藤井寺市

株式会社 N yura konko  
代表取締役



P.5

一人ひとりが環境問題を身近に、「自分ごと」として考えられるように。

広中 歩さん

派遣国  
キルギス共和国 

京都府 京都市

公益財団法人  
京都市環境保全活動推進協会  
事業推進部



P.7

世界を知ったうえで見つめ直し発信する、溢れる地元地域の魅力。

佐藤 奈央さん

派遣国  
サモア独立国 

和歌山県 有田郡 湯浅町

和歌山県 有田振興局  
地域づくり部地域づくり課



P.9

地球環境を守り継承していくことでスポーツの未来を守る。

池田 和道さん

派遣国  
ニカラグア共和国 

兵庫県 神戸市

株式会社アシックス  
サステナビリティ部  
環境チーム



P.11

教育で多様な視点を養い、やさしい社会を生み出す。

夏原 宏充さん

派遣国  
ボリビア多民族国 

滋賀県 愛知郡 愛荘町

愛荘町立愛知川東小学校  
教務主任



P.13

文化の「違い」は「学び合い」の架け橋。奈良と世界をつなぐパイプ役として。

福西 真実さん

派遣国  
インド共和国 

奈良県 奈良市

JICA関西  
国際協力推進員（JICA奈良デスク）

# 活動で紡いだ現地の人たちとの絆を胸に いまもガーナの女性と日本をつなぐ架け橋に。

## 相川 香菜

KANA AIKAWA

派遣国



ガーナ共和国

職種（活動分野）

村落開発普及員  
（コミュニティ開発）

大阪府 藤井寺市

株式会社 N yura konko  
代表取締役

大学で国際関係学を学ぶうちに開発途上国の課題や紛争・貧困に興味を持つ。大学卒業後、JICA海外協力隊に応募。ガーナに村落開発普及員として派遣され、小学校での教育支援に携わる。派遣された村の特産品であるシアバターの魅力を知り、帰国後「株式会社 N yura konko」を設立。現地生産者の生活向上に向け、シアバターを中心とした商品を輸入・販売している。

## 「自分を大切にする」ための商品でガーナと日本をつなぐ。

相川さんが2018年に立ち上げた「株式会社 N yura konko（ン・ユラ・コンコ）」は、ガーナ北部州モデュア村の特産品である「シアバター」を主力商品に、オーガニックティーなどを輸入・販売している。社名はガーナ北部に住むダゴンバ族の言葉で、英語に訳すと「My Only Love」つまり「たった一人の愛する人」となる。

保湿性が高く身体を肌荒れから守るシアバターや、無農薬のお茶などから「たった一人しかいない自分」を大切にするセルフケアを日本の購入者に提供。一方で生産者であるガーナの女性たちにも

雇用と経済的自立をもたらし、生活の質向上につなげている。

JICA海外協力隊にて派遣された村で出会った生産者の女性たちと「これからも繋がってほしい」という思いで企業を立ち上げた相川さん。商品企画、現地パートナーとの調整、品質管理、販促企画、イベント出店、顧客対応などを幅広く手掛けながら、関西圏の学校などでの講演活動も積極的に実施し、「ガーナと日本をつなぐストーリー」を届けている。

## 大学卒業後すぐにJICA海外協力隊に応募し、 ガーナに村落開発普及員として派遣。

日本と米国の大学で国際関係学を学んだ相川さん。在学中から「ただ机の上で学ぶだけではなく、現地で人に関わりながら問題に向き合いたい」と考えていた。派遣先はガーナ共和国北部州にあるモデュアという村だった。現地での職種は村落開発普及員。村落部の女性の収入向上支援や、子どもたちの学力向上を目的として活動する現地NGOに所属し、主に教育支援や生活向上支援等の活動のサポートを行った。

派遣された当初、相川さんは就業経験や資格がなかったため不安もあったが、現地での資源を活かしながら、住民が主体的に取り組める活動の仕組みづくりに奮闘した。



生産者からシアバター作りを学ぶ

ガーナの生産者と

## 「ないなら、作ればいい」 創意工夫をして子どもたちに芸術を。



現地で最初に取り組んだ活動は小学校での教育支援。子どもたちにクリエイティブ・アーツを教えた。クレヨンや絵の具など備品が不足しているなか、相川さんはアイデアをしぼる。家屋の土壁の材料を使って粘土にする、砂を使って砂絵を描く、新聞紙を使った切り絵を作る…「ないなら、今あるもので作る」そんな創意工夫を重ねる相川さんに、子どもたちは打ち解けていった。

子どもたちは現地語であるダバニ語と、一部は英語を話す。相川さん自身も子どもたちとの活動を通して、ダバニ語を学んだ。英語が少し苦手だった子どもがいたが、「カナから教えてもらってるうちに、いつのまにか英語ができるようになってた」と言われた。気が付くと相川さん自身も、日常会話レベルのダバニ語を修得していた。

## 「シアバター」づくりで女性たちが 経済的に自立できる未来を目指して。

現地での活動中、相川さんは現在の企業活動の原点となるものに出会った。ガーナ北部州にはシアの木がたくさんあり、その実から作る「シアバター」が村の特産品だ。生産を担うのは女性たち。ただ、国外の企業による生産物の購入価格は低く、現地女性たちの生活向上に寄与していない現実も目の当たりにした。

ここで抱いた女性たちへの共感、そして彼女たちの生活状況に対する問題意識が、その後立ち上げた「株式会社 N yura konko」の原点となる。帰国後、シアバターを知り合いの女性たちにお土産として配ったところ、保湿・スキンケアの効果が高いと評判に。これはいける!と相川さんは思った。

## 支援者としてではなく、 ともに挑戦した仲間として。

ガーナでの日々は「毎日が宝探し」のようだったと語る相川さん。人々の明るさやポジティブさ、困難があっても笑顔を決めない姿に胸を打たれた。それは現在の相川さんの原動力になっている。仕事のパートナーや人生のパートナーである夫とともに商品アピールのためのイベントなどにも積極的に参加しながら、大学や地元の中学校などで自らの体験と現在の活動を講演で伝えた。

ガーナに赴任した当初は、「日本から支援に来た人々」として資金・物資援助の面で期待されることにとまどいを感じたという。村の人々と対話を重ねることで認められ、協働関係を築けたことが何より嬉しかったそうだ。「ともに挑戦した仲間」として信頼を受けた記憶が、起業家として活躍する彼女の支えとなっている。



JICA海外協力隊起業支援プロジェクト (BLUE)のイベントにスピーカーとして登壇

同僚に  
聞く!



株式会社 N yura konko  
マーケティングディレクター  
杉山 加奈子さん

相川さんとは大学時代からの付き合い。人生のミッションとして現在の事業に取り組む姿に私自身も励まされています。やはりガーナ派遣中に彼女自身が目で見て身体で感じたことは力強く、そこから掲げた目標は時間が経っても決して色褪せることがないのでしょ。パートナーとして心から応援しています。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 現地の問題を解決する「当事者」の一人として活躍できます。

派遣先で現地の人々と同じ目線で生活し、ともに考え、ともに行動する、という経験は必ず人生の財産になります。単なる海外経験ではなく、現地の問題の「当事者として関わる」ことができるのが協力隊活動の強み。国や文化、考えの異なる人々と「隊員」として活動することで、人脈や人生の視野も広がると思います。ぜひ自分を信じて挑戦してください。

一人ひとりが環境問題を身近に、  
「自分ごと」として考えられるように。



広中 歩

AYUMU HIRONAKA

派遣国



キルギス共和国

職種（活動分野）

環境教育

京都府 京都市  
公益財団法人  
京都市環境保全活動推進協会  
事業推進部

協力隊への参加前は山梨県立富士山世界遺産センターで富士箱根伊豆国立公園の富士山域の管理・保全業務に携わる。派遣されたのはキルギス共和国の首都ビシュケク。現地の人々に環境教育を実施した。帰国後も環境教育に携わるため、公益財団法人京都市環境保全活動推進協会にて環境ボランティアの人材育成を行っている。

## 「自分ごと」として環境問題をとらえ、活動する人材を

協力隊の任期終了後、キルギス共和国での環境教育活動の経験を活かせる仕事を探した結果、広中さんがたどり着いたのが新天地・京都での仕事だった。

公益財団法人京都市環境保全活動推進協会は、市民の自主的な行動による環境に配慮した地域社会づくりを目指し、環境意識の普及・啓発や情報発信、各種調査研究などを行っている。広中さんが担当しているのは、協会が運営する環境保全活動の実践と研究・学習拠点「京（みやこ）エコロジーセンター」で活動する環境

ボランティアの人材育成だ。環境ボランティアは大学生から高齢者まで幅広い年齢層の人々からなる。彼らにはエコロジーセンター内での活動に留まらず、それぞれが独自に環境保全活動のありかたを模索し、各地域で実践して広げていくことが求められる。広中さんはキルギス共和国での2年間で培ったコミュニケーションスキルを活かし、自らの経験を踏まえた実践的な指導を実施。多くの人々に「自分ごと」として環境問題への意識を促せるような人材を育てている。

## 「エコロジーの専門家」として 認識されるまで。

JICA海外協力隊として広中さんが派遣されたのはキルギス共和国。公用語はロシア語とキルギス語だ。広中さんは活動開始前の訓練で、日常会話レベルのロシア語をマスターした。現地での職種は「環境教育」だったが、キルギスではその概念すらあまり理解されず、「自分が何をしにこの国に来たのか」を人々に理解してもらおうが大変だったという。

最初の3か月は大学や市立学校、日本語文化センターなどで日本語を教えることから始めた。日本語を教えながら自分が「エコロジーの専門家」であることを伝えていくうちに、現地の生徒たちや教師たちも広中さんの専門を理解してくれるようになり、派遣後4か月目くらいからは環境教育の活動ができるようになった。



大学での講義の様子。ごみを減らすためにできることを、みんなで考える。

## 自らの手で作り上げた教材は いまま現地の環境教育で活用されている。

ようやく任地での広中さんの環境教育が始まった。温室効果ガス削減や環境負荷の少ない生活、経済活動について、学校だけではなくイベントでも教育を実践していく。本格的な教育のためには教材が必要だ。広中さん自身が日本や海外の教材を参考にしながら、現地の公用語であるロシア語の教材を作った。現地のロシア語話者の協力も得ながら、2年間の活動のうち1年をかけて完成。並行して日本語教育のための教材も作成した。

こうして広中さんが作り上げたロシア語の環境教育教材は、現在もキルギス共和国で環境教育に活用されているという。自分が残したものが、帰国後も現地で役立っていることが嬉しい、と語る広中さん。現在は現地でキルギス語版が作られているそうだ。



現地の人たちにも環境教育の実践手法を伝える。

## 環境問題は世界の問題。 経験が教育に説得力を生む。

帰国後、広中さんは公益財団法人京都市環境保全活動推進協会に職を得、同協会が運営する環境保全活動研究学習拠点「京エコロジーセンター」で活動するボランティアの人材育成を担当している。ボランティアたちはセンター内での学習支援のほか、それぞれの地域社会で環境活動を実践していく。そのためには環境への高い意識と、自律的に活動する行動力を身につけなければならない。

ボランティアの人材育成を行うとき、キルギスでの経験が大きく役立っているという。環境問題は日本だけではなく、世界中の問題。自身の目で見て体験したことを伝えられることから、ボランティアを志す人々に対しても世界を俯瞰した視点から現実を踏まえて説明することができるという。

## 何かを成し遂げるには短い2年間。 でも「やればなんとかなる」を証明できた。

「京エコロジーセンター」で活動する環境ボランティアの年齢層は学生から高齢者まで幅広い。年齢も立場も違う人々と接するためのコミュニケーション力も、キルギスで培ったものだ。任地の同僚たちとは、業務内外で語り合う時間を重ねた。最初は何を教えに来たかよく理解してくれなかった同僚たちが、広中さんの仕事ぶりを認め、「一人の同僚」として扱ってくれるようになったことが嬉しかったという。何かを変え、生み出すには2年間の活動時間は短すぎるとも思った。

だが、「やろうと思えばなんでもできる」。広中さんはそれを自分で証明した。現在の仕事にも、その精神は活かしている。ボランティアたちが「環境」について地域の人々の当事者意識を育めるように、ゼロから理解されるまで苦労を重ねた経験が、広中さんの原点となっている。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ

対話を重ねて一から仕事を作り出していく、そんな貴重な体験があります。

現地の組織に所属し、活動の土台づくりから始められるのが、協力隊の活動の魅力だと思います。文化やルールに対する考え方が違う人々と対話を重ねて考えを擦り合わせていく、という経験はとても貴重でした。また、協力隊員同士に生まれるネットワークも、活動終了後の大切な財産になります。2年間の経験にはそんな価値が詰まっています。



上司に  
聞く！



公益財団法人  
京都市環境保全活動推進協会  
事業推進部長

谷内口 友寛さん

海外で困難な局面でもへこたれなかった広中さん。仕事に対して「ムリです」とは決して言わず、「なんとかします！」の意思で問題を解決してくれます。JICA海外協力隊時代の経験やコネクションを活かした展示やイベントの企画など、今後も世界を見てきた人の視点を活かして、活躍してほしいと思います。

# 世界を知ったうえで見つめ直し発信する、溢れる地元地域の魅力。

## 佐藤 奈央

NAO SATO

派遣国



サモア独立国

職種（活動分野）

小学校教育

和歌山県 有田郡 湯浅町

和歌山県 有田振興局

地域づくり部地域づくり課

地元・和歌山県の小学校・中学校で講師として勤務した後、JICA海外協力隊からサモア独立国に派遣。現地で小学生を対象に算数と理科を教えるが、新型コロナウイルスの世界的流行により、途中帰国。その後、JICA和歌山デスクを経て和歌山県庁に入庁。コロナ終息後、再びサモア独立国にJICA海外協力隊員として短期間ながら再派遣。現在は有田振興局で地域の観光PRなどを担当。

## 地域の魅力を全国に、そして全世界に発信する。

サモア独立国での活動途中、新型コロナウイルスの流行により佐藤さんは帰国を余儀なくされた。JICA和歌山デスクとして働き、再派遣のチャンスを待っていたが、この仕事を通じて「地域の魅力」を改めて感じたという。

現在、佐藤さんが所属しているのは和歌山県有田振興局。有田市・湯浅町・広川町・有田川町からなる「有田地域」の振興や支援などを行うための部門だ。この地域は山や海などの自然に溢れており、観光地としての魅力も高い。佐藤さんは一市三町の観光担当と

ともに、イベントの企画・実施やInstagramでの情報発信を行っている。ツーリズムEXPOジャパンや大阪・関西万博にも出展し、地域の観光PRも行った。気になる飲食店やスポットがあれば自らアプローチし、良い関係を構築して取材を行う。

コミュニケーションを楽しむ姿勢は、協力隊時代の経験から身につけたものだ。和歌山に移住してきた外国人の人々や、和歌山から海外に移住した人々にも地域の魅力を発信し、さらに地元を盛り上げていきたいと語る。

## 日本での講師経験が役立つが不安だったが…まずは挑戦。

佐藤さんは小学校教育の職種でサモア独立国のレウルモエガという町に派遣された。担当科目は、日本でも小中学生に教えたことがある算数と理科だ。派遣前に学校で講師をした経験は1年4ヶ月。正直なところ、不安も大きかったという。事前に同じ町で同じように小学校で活動したJICA海外協力隊前任者の話もしっかり聞いておくことで、現地での活動に向けての心構えを整えた。

現地の言葉はサモア語と英語。学校で先生や子どもたちは主にサモア語を話す。英語には自信があったが、サモア語の習得に向けて派遣後2週間、研修を受けた。活動当初は学校の授業を見学し、子どもたちとの距離を縮めるために積極的にコミュニケーションを取った。後に現地教師の助手として補助をし、少人数クラスを受け持つようになる。



お昼休みのおしゃべりタイム



算数教材を使ってペアで問題を出し合う様子



ゲーム感覚で楽しく学ぶ子どもたち

## 「もっと宿題を出してよ」と言われた、嬉しい想定外。

サモア独立国の小学校は8年制。日本で言うなら中学2年生まで年齢の子どもたちが学ぶ。授業では子どもたちの集中力を保つために工夫をした。100マス計算やカードを使った授業など、日本でもおなじみの手法で子どもたちが楽しく学べるよう心掛けた。授業の理解が進むと子どもたちも学ぶのが楽しくなってくる。「先生、もっと宿題出してよ」と日本の生徒からはまず言われないようなことを、生徒から言われたことが嬉しかった。

また、授業の時間以外にも子どもたちと積極的に触れ合った。運動場で一緒に遊んだり、一緒に昼食を食べたりした。これは日本で講師をしていたときから大切だと思っていたことだ。勉強はもちろん、学校で過ごすかけがえのない時間は子どもたちの将来の財産になる。

## 一時帰国で知った地元の良さ。和歌山県庁入庁から再派遣まで。

派遣期間中、新型コロナウイルスが世界を襲った。佐藤さんも一時帰国を余儀なくされる。せっかく打ち解けた子どもたちと離れるのは辛かったが、やむなく日本に帰国。帰国後、佐藤さんはJICA和歌山デスクとして働くことにした。それから4年間、サモアに戻りたい気持ちもあったが、改めて生まれ育った地元の良さにも気付いた。そんなとき、和歌山県庁で働くJICA海外協力隊経験者の話を聞いた。県庁にも海外出張・派遣を伴う仕事があるという。

和歌山県庁の入庁試験を受けて合格。その年の4月から入庁…というとき、2か月と短期間ながら、再派遣のチャンスが巡ってきた。入庁前、佐藤さんは再びサモアに旅立った。

## 新鮮な気持ちで再発見した地域の魅力を幅広く発信する。

サモアで子どもたちに教えたことの実績はもちろん、同国での日々は佐藤さんの人生観に変化をもたらした。現在、佐藤さんは県職員として和歌山県の有田地域の観光PRを担っている。地域の魅力を発信するためにさまざまなお店やスポットを訪れ、人々と関係性を築き、取材を行う。イベントに参加してもらうこともある。そんなふうにならんと交流を楽しめるようになったのは、サモアでの日々のおかげだ。

サモアで人々の優しさやおおらかに触れ、それまでの自分が人に気を遣い過ぎていたことに気付いた。「もっと自由に生きてみたいんじゃないか」そんなふうには、人生や日本での暮らしを見つめ直すことができた。新鮮な視点で再発見した地元・和歌山の魅力を、佐藤さんは発信し続けている。



観光PRイベントに参加



上司に聞く！



和歌山県 有田振興局 地域づくり課 主任 崎山 奈都美さん

佐藤さんは外部の関係者とコミュニケーションを取って関係づくりをするのが得意。メディアや地域PR用SNSにも積極的に出演し、リーフレットなどのデザインも手掛けてくれます。今後もこうした強みや得意分野や持ち前の明るさを活かし、積極的に地元の良さをアピールしてほしいと思います。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ あなたの『いつか』はひょっとすると『今』かも知れません。

「『いつか』では、きっとこの先やらないよ…」いつかは海外で働きたい、と語っていた私に、大学の友人がかけてくれた言葉です。その一言が、私の背中を押してくれました。協力隊に参加し、現地の人と交流できたこと、そして自分でも知らなかった自分に出会えたことなど、活動から得られたものは計り知れません。ぜひ挑戦してください。

# 地球環境を守り継承していくことで スポーツの未来を守る。



池田 和道

KAZUMICHI IKEDA

派遣国



ニカラグア共和国

職種（活動分野）

青少年活動

兵庫県 神戸市

株式会社アシックス  
サステナビリティ部  
環境チーム

株式会社アシックスに入社後3年半、国内営業を担当。JICAの現職参加制度を利用して、JICA海外協力隊としてニカラグア共和国に派遣された。現地ではストリートチルドレンの施設でサッカーの指導にあたる。協力隊活動で出会った妻と結婚、現在三児の父。2021年よりアシックス社サステナビリティ部で温室効果ガス排出量削減に向けた取り組みを担っている。

## これからも太陽の下でスポーツを楽しめる地球であるために。

株式会社アシックスはかねてから「快適にスポーツができる健やかな地球環境」を守るための取り組みを行っている。これを統括するサステナビリティ部所属の池田さんは、環境への配慮に向けた生産活動の方向性を探っている。

気温上昇のため、夏場の昼間は屋外のスポーツができない状況が生まれつつある。環境負荷を削減していくことは、スポーツの未来をつなげていくことだ。現在アシックス製品の生産拠点は90%以上が海外にあり、海外の拠点でも温室効果ガス削減に

向けた取り組みを行うことが急務。池田さんは会社としての方針と生産実態のすり合わせのために、現場と積極的にやりとりを行う。かつてはベトナムの生産現場で働いていたこともあり、その経験が今の仕事にも活かしているという。

この部門で働くようになって、アシックスという会社の社会的な存在意義と、自らの社員としての存在意義を合致させ、全社的な視点でビジネスを見ることができるようになった、と池田さんは語る。

## 社のボランティア休職制度を利用して、 海外でサッカーの指導者に。

小学校からサッカーを続けてきた池田さんは、スポーツに携わりたいと考えて株式会社アシックスに入社した。営業として働くなかで「もっとスポーツで世の中に貢献したい」と考えるようになった。そこで思い至ったのが、海外でのスポーツ指導だ。JICA海外協力隊への参加には、会社に籍を置きながら2年間ボランティア休職ができる社の制度を利用して活動を経験した先輩もいた。

本格的なサッカー指導の経験はなかったが、このチャンスに賭けてみることにした。派遣先はニカラグア共和国。長期的な内戦と不安定な政情から、荒廃した街も多い。任地である首都マナグアでも、スラムにはストリートチルドレンが溢れていた。



配属先のサッカー部



サプライチェーンの脱炭素可PJ  
海外工場の太陽光パネル視察



体育の授業風景

## 貧困や荒廃のなかにある少年たちに サッカーを通じてポジティブな想いを。

池田さんは国家警察青少年育成センターで少年たちのスポーツ教育にあたる。特に力を入れたのはサッカーだ。少年たちを集めて、サッカー部を作った。アシックスから試履き用のスパイクを取り寄せ、施設の管理を徹底した上で少年たちに貸し出した。サッカーに楽しみを見出した少年たちは、みるみる上達していく。「どうしたら勝てるの?」と真剣な目で質問する少年たちのポジティブな思いに、池田さんは胸を打たれた。

もちろん上手くいったケースばかりではない。突然、部活に来なくなった少年がいた。どうしたのか他の少年に聞いたら、警察に逮捕されたという。スポーツでどこまで人を前向きにできるのか、考えさせられた。センターでの活動に留まらず、池田さんはニカラグア中を周って子どもたちにサッカーの楽しさを届けた。

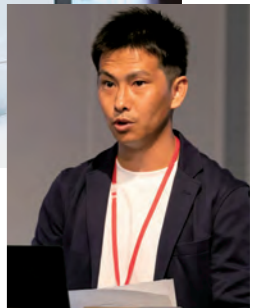
## 世界が取り組む環境問題を通し、 何十年先までのビジネスの持続性を。

帰国後、池田さんはアシックス社に復帰、品質管理・生産管理の部署を経験した。ベトナムの生産拠点の管理も担った。現在の部署はサステナビリティ部。池田さんの担当は、製品の生産過程における温室効果ガス排出量削減のための取り組みだ。生産部門と調整しながら現場に無理が出ないように配慮し、温室効果ガスの削減を進めていく。自社の生産拠点はもちろん、取引する外部業者とも環境保護に対するマインドを共有することが求められる。

現在の業務は、成果がすぐに見えるような仕事ではない。ただ、今後何十年も先の未来に世界が、そしてアシックスが存続できるか…そんな長期的な視野に立つ重要な仕事として、池田さんは大いにやりがいを感じている。



外部講演での登壇の様子



## 創業者・鬼塚喜八郎の想いを 異国の地で「実践」として経験して。

アシックス創業者、鬼塚喜八郎は戦後の荒廃した日本で、子どもたちがスポーツを通して健全な肉体と精神を育てるよう、スポーツシューズの製造・販売に乗り出した。池田さんはニカラグアでの少年たちへのスポーツ指導を通して、自社の社会的な存在意義を改めて認識したという。

そして異国の地でのスポーツ指導を通して、創業者の意志にも通じる「社会貢献」に携わった経験が、自分が企業人としてどう生きていくかの道標になった、と言う。スポーツブランドとして、持続的にビジネスを続けるため、社会に対して何が出来るのか。サステナビリティ部で活躍する今も、常に自問しながら前に進んでいる。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ

勇気を出して踏み出せば、それは自分の未来を切り開く推進力になる。

2年間の活動を通してかけがえのない人たちと出会い、多様な価値観に触れ、挑戦することができました。その経験が「確固とした自分」を確立し、未来を切り開くための推進力になったと考えています。これが現在の環境活動推進にも役立っています。私もJICA海外協力隊参加前は不安や葛藤がありましたが、チャレンジしたことで得られたものは計り知れません。

上司に  
聞く!



エグゼクティブアドバイザー  
サステナビリティ  
吉川 美奈子さん

私も海外で仕事をした経験があるのでわかるのですが、池田さんは現地経験で自身を「充実した」のだと思います。それが仕事に対する態度にも表れていますね。会社の存在意義と自分の存在意義を重ね合わせながら、何事にも臆せず取り組み実現していく彼の積極的な姿勢を、高く評価しています。

教育で多様な視点を養い、  
やさしい社会を生み出す。

夏原 宏充

HIROMICHI NATSUHARA



派遣国



ボリビア多民族国

職種（活動分野）

小学校教育

滋賀県 愛知郡愛荘町

愛荘町立愛知川東小学校  
教務主任

大学卒業後に通信教育で小学校教諭免許状を取得。地元滋賀県の公立小学校で9年間、教壇に立つ。30歳を超えたタイミングでJICA海外協力隊の現職教員特別参加制度を利用して、現地の小学校教育の充実を図るためにボリビア多民族国に派遣。帰国後は再び地元で教壇に戻り、現在は教務主任として新任教師の指導や学習環境の整備に取り組んでいる。

## 児童も生徒も、一人ひとりの違いを大切に。

大学在学中に中学校での教育実習を経験した夏原さん。そこで、学習面でのつまづきを感じ、登校に悩む生徒たちの現実を目の当たりにした。そうした経験から、小学校教育の段階でどのような支えができるのかを考えるようになった。

そんな想いが夏原さんを小学校教諭という職業に導いた。担当教員としての経験を経て、現在は教務主任という立場に。学校全体を見渡して教師たちが働きやすい環境を整えながら、児童の学力向上に向けた取り組みを推進する。また、新任の教員たちの

指導も大切な役目だ。

教員一人ひとりの想いや考え方は違う。それらを尊重しながら若手教員の成長を支えている。児童たちも同じで、一人ひとりが違う考えを持ち、個性を有している。児童たちにそんな「多様性」を尊重し、さまざまな視点で物事を見て、考えられる人間になってほしい、と願う夏原さん。それが弱者にもやさしい、思いやりのある社会を作っていくことにつながる。教師になって以来、ずっとそう信じ続けている。

## 現地の教師たちの授業ぶりをまず観察 「良いところを褒める」ことで教師たちと接近。

夏原さんの任地はボリビア多民族国の首都、スクレ。現地小学校教師たちの授業を改善し、指導力の向上を図ることが求められていた。現地で使われる言語はスペイン語。派遣前の訓練所で学習を重ね、スペイン語の会話力向上に努めた。着任当初は現地の教師たちの授業を観察し、何が課題かを考えた。観察して気づいたことを校長に逐一報告していたため、教師たちから「あの人は我々の勤務状況を見張っているスパイでは？」と警戒されたことも。

夏原さんの目から見ると、現地の教師たちの指導法は体系化されておらず、課題が多かった。ただ、できるだけ教師たちの授業の良いところを見つけ、褒めた。そうすることで夏原さんは現地の教師たちから「この人は自分たちの味方だ」と受け入れられていく。



先生達と授業づくりについて議論



派遣2日目「授業やって」と言われて行った授業

## 計算カードに小テスト… 日本での教育手法を現地で実践

子どもたちに積極的に話しかけることで、さらに語学力を高めた夏原さん。しばらくして、算数の授業を行えるようになった。スペイン語で授業をするのがとても楽しかったという。日本の学校で用いられている計算カードを利用した授業を取り入れ、その成果が学力にどう表れているかを示した。地元の教師たちも夏原さんのやり方に興味を持ち始める。

日本で実施されている小テストの仕組みも導入。小テストの結果で、子どもたちの四則計算力の向上を確認することができるようになる。狙い通り子どもたちの計算力はどんどん上がっていった。「勉強がわかるようになった！」と素直に子どもたちが喜んでくれたことが嬉しかった。

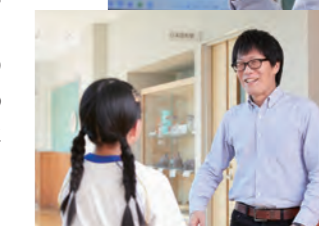


JICAのイベントのための準備

## 自主的に考え、行動する。 そんな教師の育成に向けて。

帰国した現在、夏原さんは小学校で教務主任として新任教師たちの教育を担当。ボリビアで教師たちを指導したことが、現在の役割に活かされている。現地で活動では、教師たちの教育の質改善に向けて「授業研究」を導入した。これは教師同士がお互いの授業を見学し合うことでそれぞれの手法や方針を学ぶ手法で、日本の教育現場でも教師たちの学び合いのために行われている。

ボリビアでの活動中、任地である学校を2週間離れなければならない時があった。その間、ボリビアの先生たちは夏原さんが立てた学習計画に基づき、自主的に教育の改善を進めてくれていた。そのように先生たちが自律的に学び合って、教育の質向上のために動いてくれるようになることが、現在の夏原さんが目指すところだ。



## いかなる国にあろうと、 世界の教師たちが駆ける想いはひとつ。

夏原さんの帰国後、ボリビア多民族国で同僚だった教師たちが、日本の学校教育を学ぶために訪日。夏原さんの勤務する小学校を訪れた。授業中の生徒たちの行儀良さや施設の充実度に元同僚たちは感心していたが、夏原さんは敢えて日本の教育にもまだまだ解決しなければならない課題や問題があることを隠さず話した。授業についていけない生徒もいる。学習意欲が向上しにくい子どもたちもいる。

日本の教育が「最高のお手本」ではない。ボリビアの教師たちが奮闘しているように、日本の教師たちもさらなる向上を目指して暗中模索していることを伝えた。世界中の教師たちは皆、子どもたちの健全な育成と学力向上を願っている。その想いは万国共通で、いかなる国でもその過程は途上だ。

上司に  
聞く！



愛荘町立愛知川東小学校  
校長  
奥村 晃さん

異国で教育の質向上のために尽力した夏原さん。常に学校全体を俯瞰し、若手教員の育成でも自律的な成長を促してくれます。

同僚が「こうしてほしい」と考えることを読み取り、先んじて実行してくれる積極性とリーダーシップをもって、今後も自分の役割を果たしてほしいと願っています。

JICA海外協力隊を目指すみなさんへ そのワクワク・ドキドキは応募から帰国後まで、一生の宝物です。

JICA海外協力隊に関わって、ずっと「ワクワク・ドキドキ」の時間を過ごせました。参加を考えているときも、応募して結果待ちのときも、派遣が決まってからも、訓練中も…もちろん派遣中も。そして帰国後も経験したことを活かして仕事に取り組んでいることを思うと、ずっとワクワク・ドキドキな毎日を送ることができます。ぜひ飛び込んでください。そして、自分の視野や価値観を広げてください。

# 文化の「違い」は「学び合い」の架け橋。 奈良と世界をつなぐパイプ役として。



## 福西 真実

MASAMI FUKUNISHI

派遣国



インド共和国

職種（活動分野）

日本語教育

奈良県 奈良市

JICA関西

国際協力推進員（JICA奈良デスク）

中学生のときにJICA海外協力隊の日本語教育の活動に興味を抱く。大学では日本語教育実習プログラムで台湾やフランスの大学で学ぶ傍ら、バックパッカーとして30か国以上を旅した。日本語教員資格取得後、カナダで日本語教員・幼稚園の指導員として活動。インドではJICA海外協力隊として日本語教育に従事。帰国後、JICA関西・国際協力推進員（JICA奈良デスク）として活動。

## 奈良県の人々に世界の文化を、世界の人々に奈良の魅力を。

インドからの帰国後、福西さんは国際協力推進員（JICA奈良デスク）として活動。奈良県と世界をつないでいる。学生や地域の人々にJICAの取り組みや国際協力について説明することはもちろん、県内の人々が世界に触れる機会や、世界の人々が県の魅力に触れる機会の創出のために尽力してきた。

JICA留学生による地域理解プログラムでは、奈良県十津川村の自然・文化・体験を世界へ発信できる好機と考え、福西さん自身が熱意を持って提案、プログラムを構築した。

またJICA関西が天理大学および天理市と覚書を締結のもと進める、天理大学柔道部員のJICA海外協力隊派遣を核として、市、大学、派遣された協力隊を繋ぎ、市内小学校でエジプトについて学ぶ国際理解教育を推進するなど、世界と奈良をつなぐさまざまな活動を積極的に実施している。

「文化の違いを知ることは分断を生むのではなく、学び合いの入り口に立つことです」そんな自身の想いが福西さんの原動力だ。

## 「楽しさ」を入り口に 幅広い日本語教育を実施。

JICA海外協力隊としての任地はインド共和国の首都ニューデリー。この街の低所得者層の子どもたちを対象とした学校で、日本語を教えることが福西さんの活動だった。とにかく子どもたちに楽しんで学んでもらうため、福西さんは授業を通じてさまざまな日本文化の紹介を行い、子どもたちの興味や関心を引き出していった。教科書など教材が無かったため、授業で使うスライドやフラッシュカードはすべて手作りでした。

授業を通じて日本語への関心を高めるとともに、配属先からの要望に応え、日本語能力試験対策にも取り組んだ。「楽しさ」を入り口とし、幅広い学習ニーズに応えることに努めた。



公立学校の青空教室で日本語の手遊び歌

茶道を通して日本の作法を学ぶ体験



音楽会：高学年の部で優勝したクラスの集合写真

## 日本語教育を通じて、 子どもたちの心に残したかったもの。

「5年生全員を日本語の試験に合格させてほしい」など、学校から無理難題を持ちかけられることもあったが、できることとできないことを明確に示し、着実に一歩ずつ前に進んだ。2年目には音楽会の開催を企画。日本語の歌を歌うことも教育につながる、ということが学校や保護者から最初は理解されなかったが、日本での学校教育の写真や映像を使って説明を尽くした。

また、日本人駐在員などを学校に招き、生徒達が日本語で校内を案内する取り組みも行った。福西さんから日本語を学んだ子どもたちには、将来ビジネスの場でそれを役立てる日が来るかもしれない。もしそうはならなくても、彼らがいつか日本語話者に会ったとき、少しでも親しみをもって接してくれればいい。それだけで十分だと福西さんは思っている。

## 帰国後も精力的に活動し、 地元と世界の橋渡し役となる。

帰国後はJICA関西で奈良県担当として活躍する福西さん。世界の情報を紹介するパネル展示や、奈良県での世界と自分のつながりを感じるセミナー、奈良県内の学校での国際理解教育などに携わっている。地元の企業と連携し、日本で手に入る食材で各国の料理を作り世界を知るワークショップも開催。デリーの子どもたちと奈良県の小・中学校の子どもたちをオンラインでつなぐ交流授業の企画も手掛けた。

国際協力や国際理解への取り組みに関心を持つ自治体・教育機関・企業・団体があれば、必ずその手助けをする。そうすることで奈良県を世界とつなげることができれば…と願い、福西さんはいつも斬新なプランを練り、提案している。



## 他国を知り、人を理解する取り組み。 それを地域に根付かせていきたい。

こうした企画を単発ではなく、毎年継続して行えるようにするため、関係者と対話を重ねる。外国への関心や理解を進めるための催しや取り組みを、地域に根付かせることが福西さんの目標だ。

「国際協力」とは、遠い国の課題に「部外者」として関わることではない、と福西さんは考える。JICA海外協力隊の活動を通じて実感した、世界の課題と日本の課題は深くつながっているという視点が、その原点にある。様々な観点から世界と日本とのつながりを知り、一人ひとりが世界と自分の関わり方、向き合い方を考えること。そして、そこから自分自身にできる一歩を踏み出すことこそが、「国際協力」ではないだろうか。福西さんによるこうした世界を知る機会の積み重ねが、奈良県から国際協力の輪を広げていく一助になると信じている。

上司に聞く！



JICA関西 市民参加協力課 企画役 後藤田 落子さん

福西さんの、物怖じせず相手の懐に飛び込み信頼関係を築ける胆力は、協力隊活動において多様な文化背景を持つ人々と真摯に向き合い、信頼を積み重ねてきた経験が基盤となっているのだと感じています。今後も協力隊や国際協力推進員としての経験を活かし、世界と奈良とをつなぐ活躍を期待しています。

## JICA海外協力隊を目指すみなさんへ 予想もできない出会いと経験が待っている。

世界は広いですが、他国での活動を通じて「人と人」の距離は予想以上に近いことに気付かされました。真剣に相手に向き合って理解することで、他者との関わり方に深みが生まれたように思います。勇気を持って一歩踏み出せば、あなた自身が思いもよらなかった出会いと経験が待っています。それはきっと、あなたの人生に大きな変化をもたらすことでしょう。

JICA海外協力隊

検索

<https://www.jica.go.jp/volunteer/>

## JICA 関西

独立行政法人 国際協力機構（JICA）関西センター

〒651-0073 兵庫県神戸市中央区脇浜海岸通1-5-2

Tel : 078-261-0341 (代)

Fax : 078-261-0357

2026年 3月

